Osaka University Knowledge Archive

Title	欺瞞コミュニケーションの解読に関する研究 : 嘘をつく行為者と嘘を見抜く判断者の感情に基づく考察
Author(s)	朴, 喜静
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33994
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕欺瞞コミュニケーションの解読に関する研究
-嘘をつく行為者と嘘を見抜く判断者の感情に基づく考察-

学位申請者　朴　喜静

嘘をつく行為者は嘘をついているときになんらかの非言語チャネルを使用し、そして嘘を見抜く判断者は行為者のメッセージが嘘かどうかを判断する。これらの一連の過程において、嘘をつく行為者に表われる欺瞞行動と、それを見抜く判断者の欺瞞に関するステレオタイプとの乖離が正確な嘘の解読を妨害する原因となる。

本研究は欺瞞コミュニケーションにおける嘘をつく行為者と嘘を見抜く判断者の「感情」に注目し、正確な嘘の解読を目指した。

嘘をつく際にはそれを見破られるのではないかという不安、嘘をつくことに対する罪悪感、相手を騙す喜びという3つの感情が生じると指摘されている（Ekman, 2001）。こうした嘘をつくときに引き起こされる感情は行動を生み出す。ゆえに、嘘をつくときに生じる感情をうまく統制できるかどうかという個々人の特性は行動にも影響を与える。本研究の結果から、嘘をつくときに生じる感情をコントロールする能力によって非言語行動の表われ方が異なることが示された。したがって、これらの個人特性による行動的差異を認識することは、正確な嘘の解読につながるであろう。

以上のように、従来の欺瞞研究では、嘘に関わる行動的手がかりについて多くの研究が行われてきたが（e.g., DePaulo et al., 2003; Vrij et al., 2000）、真偽性判断の正答率はチャンスレベルに過ぎないと報告されている（Bond & DePaulo, 2006）。その原因として、嘘を見抜く判断者のステレオタイプと、実際に欺瞞と関連する行動の手がかりとは乖離しているため、正確な嘘の解読が妨害されてしまうことが挙げられる。そこで、真偽性判断の正答率を高めるためには、嘘を見抜く判断者が真偽性判断をする際に採用する嘘の言語的・非言語的ステレオタイプを把握し、それを明確にした上で、真偽性判断を向上させる要因を探る必要があるだろう。本研究の結果から、嘘をつくときに表われる非言語行動は、個人的・状況的要因によって異なるにも関わらず、人は嘘をつくときに非言語行動が増加するというステレオタイプを持っていることが確認された。これに対し、言語的側面では嘘をつくときに矛盾性が多くなり、詳細な内容が少なくなるという実際嘘をつくときに表われる言語的特徴と一致するステレオタイプを持っていることが示された。しかし、人は自分が思い込んでいる誤ったステレオタイプに基づき、ある人が視線を回避すると“あの人は嘘をついている”というようにステレオタイプに依存して判断する傾向がある。

このように、嘘を見抜く判断者が誤った嘘のステレオタイプを利用して判断しないようにするため、1つの要因として判断者の「感情状態」を取り上げた。本研究の結果から、嘘の解読の精度は嘘を見抜く判断者の感情状態によって向上させられることが示された。特に、嘘を見抜く判断者がどのような手がかりに注意を向けるかによって判断の精度が異なることが示された。このことから、ある人が嘘をついているかどうか判断するに先立って、判断者は嘘の判断を妨害するステレオタイプ的判断の予防策として、自分の感情をコントロールするトレーニングが必要であることが示唆される。また、本研究で嘘の判断に至るまでのプロセスを解明することで、嘘を見抜く判断者がどのような感情状態にあり、どのような判断の手がかりを用いて判断するのかを知ることができた。したがって、自分がどのような感情状態で、どのような根拠に基づいて判断したかを振り返ることによって、より正確な嘘の解読に導かれるであろう。

本研究の結果をまとめると、嘘をつく場面では、嘘をつく行為者の感情により言語的・非言語的手がかりが表われ（記号化）、嘘を見抜く判断者は、これらの手がかりに基づいて嘘かどうかを判断する。このような一連の過程を欺瞞解読と呼ぶ。その中で、嘘を見抜く判断者は、自分が持っている嘘のステレオタイプを利用して判断する傾向があり、嘘と実質的に関連が認められていない非言語的ステレオタイプを利用することで、真偽性判断の正答率が低くなる。しかし、嘘を見抜く判断者には、あるメッセージが嘘かどうか判断する際に、多様な感情が生じており、判断者の感情状態が真偽性判断の正答率を増減させる要因になる。すなわち、判断者が喜びあるいは怒りの感情状態の場合、注意深く考えず、単純に嘘をつく行為者の非言語的手がかりに着目して判断するため、正答率が低くなったが、判断者が悲しみの感情状態にある場合、システマティックな処理を促進するため、より言語的手がかりに注意を向けて判断することになり、正答率が高くなった。このような一連の過程を解明することで、より効果的に嘘の解読をするこ

とができるのではないかと考えられる。

以上の結果により、正確な真偽性判断を必要とする捜査場面への応用ができるであろう。捜査場面では、嘘を見抜く判断者が嘘をつく行為者の言語的・非言語的手がかりを観察し、それに基づいて正確に判断しなければならない。嘘をつく行為者の感情統制能力によって非言語行動の表われ方が異なることを認識すること、自分がどのような嘘のステレオタイプを持っているかを把握すること、そして嘘かどうかを判断する際に判断者の感情をコントロールする方法などのトレーニング・プログラムを開発することで、効果的・正確な嘘の解読が期待される。

欺瞞研究領域において、欺瞞コミュニケーションの解読の研究は進展しつつある。本研究の基礎的知見を基盤とし、実践的応用へ拡張させることで、欺瞞研究の発展を期待する。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　朴　喜静　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	釘　原　直　樹
	副 査	教授	三　宮　真　智　子
	副 査	教授	森　川　和　則
	副 査	東京未来大学教授	大　坊　郁　夫

論文審査の結果の要旨

本論文は欺瞞コミュニケーションにおける嘘をつく行為者と嘘を見抜く判断者の「感情」に注目し，正確な嘘の解読に資する実証的研究を行った。

本論文では，まず行為者の観点から，嘘をつくときに生じる感情をコントロールする能力が非言語行動に与える影響について検討した。次に，判断者の視点から，判断者が真偽性判断をする際に採用する嘘の言語的・非言語的ステレオタイプを明確にし，実際に嘘をつくときに表われる非言語行動と，判断者が思い込んでいる嘘のステレオタイプとの乖離を確認した。このような乖離が正確な嘘の解読を妨害する原因となる。そこで判断者が誤った非言語的ステレオタイプを利用して判断しないようにする要因の一つとして判断者の感情を取り上げ，判断者の感情状態が真偽性判断の正答率に及ぼす影響について検討した。

これらを踏まえて，欺瞞コミュニケーションの解読への影響過程モデルを提案した。嘘をつく場面では，行為者の感情により言語的・非言語的手がかりが表われ（記号化），判断者は，これらの手がかりに基づいて嘘かどうかを判断する。このような一連の過程は欺瞞解読と呼ぶ。その中で，判断者は，自分が持っている嘘のステレオタイプを利用して判断する傾向があり，嘘と実質的に関連が認められていない非言語的ステレオタイプを利用するために真偽性判断の正答率が低くなる。しかし，判断者には，あるメッセージが嘘かどうか判断する際に，多様な感情が生じており，判断者の感情状態が真偽性判断の正答率を増減させる要因になる。すなわち，判断者が喜びあるいは怒りの感情状態にある場合，注意深く考えず，単純に嘘をつく行為者の非言語的手がかりに着目して判断するため，正答率が低くなる。一方，判断者が悲しみの感情状態の場合，システマティックな処理をするため，より言語的手がかりに注意を向けて判断することになり，正答率が高くなる。このように，本研究は真偽性判断に至るまでの影響過程の解明を試みている。これは，効果的な嘘の解読の一助になるであろう。以上より，本論文は博士（人間科学）の学位に値するものと判定された。